

Title	1943年の彗星界 (1943年の天文年鑑)
Author(s)	
Citation	天界 = The heavens (1942), 23(259): 24-25
Issue Date	1942-12-01
URL	http://hdl.handle.net/2433/168527
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

冥王星の1943年

1930年の初めにトンボ1氏が発見してから、今年は13年目であるが、依然として此の星は、蟹座のガ星の東北 $2^{\circ}\sim 3^{\circ}$ あたりを、悠々と運行してゐる。光りが弱くて、普通的手段では殆んど其の姿を見せない。“幽冥界の支配者”だから、止むを得ないが、しかし世界第一流の望遠鏡を持つてゐる人は、寫眞法によつて観測し得ると思ふ。さしあたり、此の星の變光状態の有無を確かめることは、大きい功績であらうと思はれる。この冥王星の位置は、大體、下の通り。

日時	赤經(1950.0)			赤緯(1950.0)	地球より距離 單位	光度(眼視)
	h	m	s			
1943年 1月 1日	8	42	18	+23° 31.8	37.23	14.5
2月 1日	8	39	31	+23 45.1	37.12	14.5
3月 1日	8	36	58	+23 55.1	37.28	14.5
4月 1日	8	35	11	+24 0.1	37.69	14.5
5月 1日	8	35	09	+23 58.7	38.14	14.5
6月 1日	8	36	37	+23 51.3	38.60	14.5
7月 1日	8	39	26	+23 40.6	38.90	14.5
8月 1日	8	43	05	+23 28.3	38.98	14.5
9月 1日	8	46	45	+23 17.9	38.83	14.5
10月 1日	8	49	33	+23 12.3	38.40	14.5
11月 1日	8	51	04	+23 12.9	37.88	14.5
12月 1日	8	50	55	+23 20.4	37.37	14.5
1944年 1月 1日	8	49	07	+23 34.1	36.99	14.5

冥王星の観測時期は、毎年の年末から、翌年三四月頃まで、大體寒い頃である。今1943年は一月27日に太陽と對衝になる。その時、地球からの最短距離は37.1單位、即ち55億7千萬キロ、光達時間は5時間08分である。太陽と會合するのは八月1日。又、西留は四月19日、東留は十一月11日である。

1943年の彗星界

今1943年中に近日點へ歸つて來る週期彗星は、今まで知れてゐるもののうち、下記のものが豫想される。

星の名	週期	近日點	離心率	引數	昇交點	傾斜	歸來期
		距離					
ネウイミン	5.43	單位 1.335	0.568	193 38	327 44	10 38	4月
ダレスト	6.68	1.375	0.612	174 17	143 44	18 03	9月
ダニエル	6.82	1.536	0.573	6 07	70 18	19 50	11月
ショルマス	7.93	1.166	0.707	46 15	90 25	14 42	8月

この4つの彗星のうち、最初に記したネウイミン星は、1916年と1927年とに観測されたものであるが、1921年と1932年とには、見付からなかつた。これは、週期が凡そ5年半であるため、観測の都合は、1回毎に良かつたり、悪かつたりするのが交代するからであらう。つまり、観測不能といふのは、其の出現

期に、地球から見てみると、星が太陽の向ふ側にまはつて了つて、距離も遠く、日光の妨げもあつて、見られないのである。かうした都合から言ふと、こんどの1943年は、決して都合の悪い方ではない。四月末に近日點へやつて來る豫定が誤りでなければ、其の時の星の位置は、地球に近くて、しかも太陽と正反對の側にあるわけだから、光度も相等なものだらうし、發見も、觀測も有望である。ことによると、年の始めに西空の可なり高い天空で發見されるだらう。そして、六七月頃まで、觀測が行はれると思ふ。因みにネウイミン氏はソ聯のクリミヤ半島の南端にあるシメイス天文臺にあつたが、今は中央アジアのキタブ天文臺に居る。

次ぎの**ダレスト彗星**は、1851年にダレストが發見したのが最初で、それ以來、1857年、1870年、1890年、1897年、1910年、1923年に見えたが、1930年と1937年とは、續けざまに發見が不成功だつた。こんどは、可なり都合が良いから、見つかるかと思ふ。九月に近日點へ來るとすれば、その頃、西の夕空に見えるわけだが、強力な寫眞望遠鏡ならば、七八月頃に發見されるかも知れない。年の末に近い秋の頃、この星は地球へも近づき、望遠鏡の持ち主を長く楽しませるだらう。しかし、肉眼に見える明るさとは、なるまい。

ダニエル彗星は、1937年の初めに清水眞一氏が捕へたもので、1909年にダニエルが發見して以來、1916年にも、1923年にも、1930年にも、發見が行はれず、世界の人々を失望せしめ、もはや全く見失はれたのかと、あきらめられてゐた星であるだけに、清水氏の再發見は全學界の喝采を博したものであつて、二十世紀に於ける我が國の天文界の一傑作であつた。勿論、これには東京の廣瀨氏の苦心がある。かうして此の星は日本人の手で確實に捕へられた。今年は、この星の歸來する年であるが、十一月に近日點にやつて來るとすると、其の頃、この星は太陽と反對の方角にあり、地球からの距離も近いから、恐らく十一月を待たないで、夏の末か、秋の初めには發見されるだらう。

ショルマス彗星は1911年にフランスのニス天文臺で發見され、その後、1919年と1927年とに再發見された。しかし、1935年には見つけれなかつた。こんどは、八月に近日點へやつて來る豫想が誤つてゐなければ、地球からの距離は始終遠く、光りも弱いから、發見は不可能かも知れない。萬一見つかるにしても、それはよほどの熟練家が、六七月頃の東の曉空に見つけることになるだらうと思はれる。

毎年例にもれず、多分、この年も、全く新しい彗星が出現する可能性はある。殊に、かうした新彗星は、光の大きい、尾の立派なものが現はれることが屢々あるから、一般のアマチュアたちも油斷せず、天空を搜索して貰ひたい。見つかつたら、本部（田上天文臺）に知らせることを忘れないやうに。